

平成23年度

第1回 富山高等専門学校 運営諮問会議

会 議 録

平成23年7月27日（水）

平成23年度 第1回 富山高等専門学校 運営諮問会議

日 時：平成23年7月27日（水）午前10時

会 場：富山高等専門学校本郷キャンパス大会議室

【会議次第】

1. 開会挨拶

2. 出席者紹介

3. 議長選出

4. 議 事

(1) 富山高等専門学校年度計画について

「平成22年度 年度計画実施状況・平成23年度 年度計画」

(2) その他

5. 閉会挨拶

【出席委員】

〔敬称略、順序不同〕

遠 藤 俊 郎（富山大学学長）
石 塚 勝（富山県立大学工学部長）
松 坂 武 彦（社団法人全日本船舶職員協会副会長）
梅 田 ひろ美（株式会社ユニゾーン代表取締役社長）
正 橋 哲 治（立山科学グループ管理部人材開発グループグループ
マネージャー）

<代 理>

坪 池 宏（富山県教育委員会県立学校課主幹）
（木 下 晶 富山県教育委員会県立学校課長の代理）

【欠席委員】

高 田 勇（富山県中学校長会会長）
河 村 孝 一（富山高等専門学校技術振興会会長）
黒 田 輝 夫（富山県中小企業団体中央会会長）
犬 島 伸一郎（財団法人北陸経済研究所理事長）
金 岡 純 二（公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長）
山 口 光 三（富山商船同窓会会長）

【富山高等専門学校出席者】

米 田 政 明（校長）
丁 子 哲 治（副校長）
成 瀬 喜 則（副校長）
本 江 哲 行（教務主事）（本郷）
川 淵 浩 之（学生主事）（本郷）
水 谷 淳之介（学生主事）（射水）
安 田 賢 生（寮務主事）（本郷）
水 本 巖（寮務主事）（射水）
飯 嶋 裕 一（事務部長）
杉 森 伸 平（囑託）
中三川 敏 之（総務課長）
中 島 鉄 行（管理課長）

梅 村 智 文 (学務課長)
藏 川 一 正 (総務課課長補佐)
綿 谷 浩 (総務課課長補佐)
柴 田 淳 (総務課課長補佐)
上 木 祐 一 (学生課課長補佐)
清 水 由美子 (総務課主査)

[開会 午前10時02分]

1. 開会挨拶

【飯嶋事務部長】 本日は、お忙しい中、委員の皆様方にはご参集いただきまして、ありがとうございます。

議事に入るまでの間、進行を務めさせていただきます本校事務部長の飯嶋です。よろしくをお願いいたします。

初めに、開会に当たりまして、本校の米田校長から皆様にご挨拶を申し上げます。

【米田校長】 おはようございます。

今日は富山高専の運営諮問会議ということで、委員の先生方には大変お忙しい中、また遠路足をお運びいただきまして、ありがとうございます。

この会議は、本校の学校運営、教育、研究、社会貢献活動の全般にわたりご指導いただき、またいろいろご助言も賜る会議です。

ご案内のように、富山高専は一昨年10月に、旧富山工業高専と旧富山商船高専の2校の統合で誕生しました。2つのキャンパスを持っていること、国立高専の中では6学科プラス専攻科と規模が若干大きいこと、また地域人材開発本部という組織を持っていて、社会貢献あるいは国際性向上に力を入れるようにという意味で、新モデルの高専、仲間内では「スーパー高専」と言われています。

これもご案内かと思いますが、国立高専は今、全国に51あります。この51の高専が一つになって独立行政法人を作っています。「国立高専機構」と言っていますが、この51高専を8つの地区に分けて運営されています。本校は東海北陸地区に入っています。その地区の拠点としての役割を果たすようにと、期待もされ言われてもいます。

そんな中で今日ご審議、ご助言を賜りたいのは、独立行政法人ですので中期目標、中期計画があります。国立大学法人の場合は期間は6年ですが、国立高等専門学校機構の場合は5年です。最初、平成16年から5年間、第1期の中期目標、中期計画期間がありまして、現在は平成21年から25年の第2期の中期目標、中期計画期間のちょうど真ん中の年になっています。

中期目標は、主務大臣から示され、それを達成するための計画を立てているわけですが、今日は、平成22年度、昨年度の年度計画の実施状況、また平成23年度、今年度の年度計画

をどう立てたかについてお示しをしてご意見を賜りたいと思います。

高専は入り口から見ますと、中学生、その保護者、あるいはその中学の進路指導の先生方には高校のように見えるかと思います。ただ、5年一貫教育、専攻科まで上がりますと7年一貫教育でやっていますので、出口から見ますと大学のように見えます。そういう意味では、高専の教員たちはある意味繁忙を極めています。部活動もありますし、また寮も持っています。そんな中で課題を抱えています。その辺についてもご助言等を賜ればと思います。

12時までというあまり時間のないところではありますが、どうぞよろしく願いいたします。

少し長話になりましたが、ご挨拶にかえさせていただきます。

2. 出席者紹介

【飯嶋事務部長】 ここで、本日ご出席いただいています委員の皆様を紹介させていただきます。

富山大学長 遠藤俊郎様。

富山県立大学工学部長 石塚 勝様。

富山県教育委員会県立学校課長 木下 晶様の代理で県立学校課主幹 坪池 宏様。

社団法人全日本船舶職員協会副会長 松坂武彦様。

株式会社ユニゾーン代表取締役社長 梅田ひろ美様。

立山科学グループ管理部人材開発グループグループマネージャー 正橋哲治様でございます。

また、富山県中学校長会会長で砺波市立出町中学校長 高田 勇様、富山高等専門学校技術振興会会長 河村孝一様、富山県中小企業団体中央会会長 黒田輝夫様、財団法人北陸経済研究所理事長 犬島伸一郎様、公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長 金岡純二様、富山商船同窓会長 山口光三様は、本日ご都合によりご欠席となっておりますので、ご了承下さい。

続きまして、この場に同席させていただいています本校関係者を紹介させていただきます。

校長の米田です。

副校長の丁子教授です。

同じく副校長の成瀬教授です。

教務主事（本郷キャンパス）の本江教授です。

学生主事（本郷キャンパス）の川淵教授です。

同じく学生主事（射水キャンパス）の水谷教授です。

寮務主事（本郷キャンパス）の安田教授です。

同じく寮務主事（射水キャンパス）の水本教授です。

嘱託の杉森です。

総務課長の中三川です。

管理課長の中島です。

学務課長の梅村です。

また、事務部の担当職員等も同席していますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

以上で紹介を終わらせていただきます。

続きまして、本日、席上に配付しています資料の確認をさせていただきます。

（資料確認——記事省略）

【飯嶋事務部長】 本日の予定ですけれども、この会議自体は12時までをめぐりご協議いただく予定にしています。その後、委員の皆様方には、2階の応接室で昼食をとりながら校長と懇談していただき、午後1時に終了することになっています。

3. 議長選出

【飯嶋事務部長】 本日の議長についてですが、本校運営諮問会議規則第5条では委員の皆様との互選となっていますけれども、いかがでしょうか。

（発言する者なし）

【飯嶋事務部長】 もしご提案がなければ、僭越ですが、本校の提案として富山大学長の遠藤委員にお願いしたいと思いますが、皆さん、いかがでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

【飯嶋事務部長】 ご賛同いただきましたので、今後の議長を遠藤先生にお願いしたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

（遠藤議長 議長席へ移動）

【遠藤議長】 議長を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

限られた時間ですけれども、有意義な議論になりますようお願いいたします。

4. 議 事

(1) 富山高等専門学校年度計画について

「平成22年度 年度計画実施状況・平成23年度 年度計画」

【遠藤議長】 本日の議題は、本学の平成22年度の年度計画の実施状況及び23年度の年度計画です。

資料説明につきましては、最初に22年度の実施状況、それから23年度の計画という形で説明し、皆様のご意見、ご指摘を拝聴していきたいと存じます。

最初に、米田校長から概要についてお話をいただいた上で各項目の説明に入っていくと思いますが、いかがでしょうか。

【米田校長】 少し時間をちょうだいして、概要を私から説明します。

膨大な資料を配付させていただきましたが、A3横長の参考資料「☆☆高専機構 第2期中期目標／中期計画／平成23事業年度 年度計画☆☆」をご覧くださいながらお聞きいただきたいと思っております。

先程ご挨拶でも申しましたが、全国に51ある国立高専は一つの独立行政法人を形づくっていきまして、それを「高専機構」と呼んでいます。

その平成21年から5年間の第2期中期目標が左の列、その目標を達成するための中期計画5年分が真ん中の列、23年度、今年度何をすべきかといった年度計画が右の列になります。10ページもので、これも相当大きいのですが、この表の作りからご説明します。

序文に国立高専とは何をするとどこかということが書いてあるわけですが、ポイントだけ申しますと人材育成。どのような人材かといいますと、職業に必要な実践的かつ専門的な知識及び技術を有する創造的人材。キーワードとして、「実践的」と「創造的」がくっつくかと思っております。これらを育成するのが高専であるという目的が前文に書いてあります。

そのためにいろんなことをやるわけですが、1/10ページの下の方、「Ⅱ 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項」の中に、高専ということで「1 教育に関する目標」、これを、2/10ページの「(1) 入学者の確保」「(2) 教育課程の編成等」、3/10ページの「(3) 優れた教員の確保」、4/10ページの「教育の質の向上及び改善の

ためのシステム」、5/10ページの「(5) 学生支援・生活支援等」「(6) 教育環境の整備・活用」まで6項目に分けて目標が掲げられています。

この中で触れさせていただきたいのは、まず「入学者の確保」。人材育成機関、教育機関ですので、志願者がいないことには成り立たないということで、真ん中の中期計画の下の方に「18,500人以上」という数字が見えます。数値目標はほとんどないのですが、この「入学者の確保」の項目に、毎年18,500人以上の志願者を維持する、最終年度においてもそうだと書いています。これは第1期、1つ前の5年間のときも同様のものを書いています。これは第1期、1つ前の5年間のときも同様のものを書いています。これは第1期、1つ前の5年間のときも同様のものを書いています。15歳人口が漸減する中でこの目標は少し大き過ぎたような気もしますが、一旦達成できなかつたからといって第2期目にこれを下げるわけにはいかない。そういう文部科学省主務官庁の指導もあり、引き続きこれが入っています。ということで、志願者対策、志願者確保にはどの高専も力を入れることになっています。

「教育課程の編成等」の中期目標のところ、「4地区の高専」というのが目に入るかと思いますが、これは高度化再編統合、富山、宮城、香川、熊本を統合したものです。新モデルの高専を着実に進めるということです。

「優れた教員の確保」の中では、公募制を原則として人事を行う。学位を有する者、民間企業等で実績のある者、多様な経験を持つ教員を採用することをうたっています。いろんな目標を掲げ、それを達成するための計画が細かに書いてあります。

戻りまして、5/10ページの「2 研究に関する目標」です。高専の先生方は、出口から見ると大学の先生に見えることもありまして、研究も課せられていますが、自分の授業の高度化等のために常に研究、技術開発等をするようにという意味の研究です。大学の先生であれば、興味、関心にに基づき研究することもあるかと思いますが、高専の場合は、どちらかというと自分が担当する授業の高度化のためにという意味です。その研究に関する目標を掲げています。

また、スーパー高専では特にそうですが、6/10ページの「3 社会との連携や国際交流に関する目標」、これに力を入れるように期待もされ言われてもいます。国際交流に関しては「留学生30万人計画」、これはまだ日本政府自身がこれを維持している状況ですので、できるだけ留学生を受け入れる方向で改善するよというということです。

7/10ページの「4 管理運営に関する目標」、これはスケールメリットを生かして下さいということ。51全国に展開していて、それを一つの独法として束ねている組織はほかにはないだろうと。大いにスケールメリットを生かすよというということです。

8/10ページのⅢ、Ⅳ、さらに10/9ページ、10/10ページと続きますが、ここには効率化や財務の関係などが書いてあります。

独立行政法人は毎年、前年度に比べ1%の効率化係数が係ることになっていて、年々減る運営費交付金をどうするのか、外部資金を獲得する努力をますます必要とする状況になっています。

このようなことが、高専機構が掲げた目標であり、中期計画であり、今年度の計画。これに齟齬を来さない範囲で、各高専それぞれ事情があるだろうということで、富山高専におきましても全体計画に合う形で、なおかつ本校の特色を入れた富山高専としての中期計画をつくっています。それが資料1になります。

細かくて虫眼鏡が欲しいくらいですが、今日ご説明するのは富山高専の第2期中期計画であり、22年度の年度計画はどう実施したかということであり、一番右の列は本年度の年度計画の案をお示ししています。

個別については順次担当からご説明していきますが、今言った高専機構が持っている目標計画と齟齬を来さない範囲で、本校の特色を組み込んだ盛りだくさんの内容、22年度は結構いろいろやったなという思いがありますが、そのこと。それから、23年度はここまでやりたいということが順番に出てまいります。

私からの概要説明は以上とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

【遠藤議長】 各論に入るわけですが、今の米田校長ご説明について、大きな枠の中でご質問などありませんか。

【遠藤議長】 ひとつ確認させてください。実を言うと、私、高専のことをよく理解していませんで、独法化後の高専は、大学と同様に各高専がそれぞれ独自の中期プランや中期目標を持つものと思っていたのですが、そうではない。全国の高専としての1つの大きな枠が決まっていて、その中で各校が独自性、特徴を生かしながら運営・活動するということですね。

【米田校長】 おっしゃるとおりです。

【遠藤議長】 そういう意味では、全体でひとつ枠にしばられている感じが……。

【米田校長】 ガバナンスと言います。

【遠藤議長】 ガバナンスかマネジメントかわかりませんが、枠があるんですよね。

【米田校長】 そうです。

【遠藤議長】 でも、改めて高専というのはすごい組織だと感心いたします。この厳しい

社会状況の中で、51の高専をひとまとめにして、二十歳前後の若者を5年かけて、しかも、実践的かつ専門的に統一性を持って教育する。昨今、教育の体制や資質が問われることの多い大学より、ずっと実力のある生徒あるいは人材を育成できる組織と言えるのではないでしょか。

ただ世間には、高専というのは、昔の感覚と言ったら失礼かもしれませんが、高校と短期大学がくっついた形で、その後大学進学ということで、立場が中途半端なところという見方も少なくないと思います。そうではない高専は、国の一つの大きな教育機関として、理工系の人材育成という点においては非常に重要な役割を果たす、特徴ある存在である。その意味で、5年間の中期計画というのはすごく重要であり、しっかり評価して、方向性を決めていく認識が必要であり、今日のディスカッションも、是非そんな視点も含めながらやっていただきたいと思います。

米田先生、何か一言、追加でコメントありますか。

【米田校長】 高専の位置づけといたしますかあり方については中教審でも議論されていて、高専部会でも高専そのものの議論がされましたけれども、今、キャリア教育、職業教育に関するものの中でも、高専の位置づけをもう少し明確にしよう。先生がおっしゃるように、高校と短大がくっついたぐらいの学齢でと、一般に中途半端に思われているところも実はあります。その辺をしっかりプレゼンスといたしますか存在価値を認識して、またそれを世間に対していい意味のPRをしていかなければいけない、そのようなことが言われています。

【遠藤議長】 そのとおりだと思います。

蛇足ですけれども、この間米田先生が来られたときに、「えっ、高専のような組織、日本にはほかにないのではないですか。自衛隊ぐらいではないですか。教育関係、行政関係でも、そんな組織はどこにもないですよ」と言ってしまったのですけれども。

では、議事を始めましょう。

教育、研究、社会貢献、国際交流、管理運営、その他と各項目別に分けたいと思いますが、最初に重要なのが教育だと思います。この部分から入らせていただきます。

各項目についてご説明いただきたいと思います。

本江さんからお願いします。

【本江教務主事】 私の方から、「入学者の確保」からご説明したいと思います。

資料はA3横の資料1です。

こちらは、先程米田校長が説明しましたように、高専機構の項目に沿って、一番左側に第2期中期計画、これは富山高等専門学校第2期中期計画です。それに基づきまして、平成22年度の年度計画、平成22年度の実施状況、参考資料、平成23年度の年度計画と記入しています。

上から順番にご説明したいと思いますが、まず「入学者の確保」の①、きちんと中学校と連携をとる、マスコミやホームページに向けて富山高専の教育研究活動をしっかりPRする、英語版という形で全世界に情報を発信するというのが第2期中期計画となっています。

それに基づきまして、平成22年度の内容を説明させていただきます。

先程議長からもありましたように、実は高専は非常にマイナーです。中学生100人に対し1名しか高専に行かないという割合ですので、非常に知名度が低いです。ということから、本校におきましては富山県内の中学校83校について年2回訪問しています。そのほかに、本校には石川県及び岐阜県の北部からも学生が来ていますので、そちらの中学校も伺っています。また、志願者対策室、広報戦略室の2つの組織が共同でPR資料を作っています。「D r e a m s」「COLLEGE GUIDE」「富山高専で君の未来を拓こう！」といった広報物を積極的に用いて各中学校等を訪問しています。

Webサイトにおきましては、特にオープンキャンパス、公開講座、個別相談会等を実施していきまして、そういう情報を集めるとともに、Q&Aコーナーを作っています。こちらは、中学生あるいは中学校の先生からいろんなお問い合わせをいただき、それにすぐ答えるシステムになっています。

英語版のホームページについては、昨年度は作成準備を進めていました。

富山県内の7高等教育機関による戦略的・大学連携支援事業で広告1枚を打ちまして、その中に本校も参加させていただいています。本校のいろいろなイベントのプレスリリースを積極的に行い、本校のPRに努めたのが平成22年度の実施状況です。

今年度はそれを継続して質を高め、同じように県内の中学校訪問を2回以上実施する。また、Webをさらに充実する形で検討を行っていくということです。英語版のホームページを立ち上げ順次公開していくということです。富山、石川、福井、新潟、舞鶴と共同して中部日本海共同PRサイトをやっていくということ。さらに、マスコミを活用していく形で平成23年度の年度計画を立てさせていただきました。

②です。入学説明会、いろいろオープンにしたことの成果を調査する。ホームページで

意見収集を行う。高専ブランドプロジェクトを通して積極的に女子学生を入学させ、世界で活躍してもらう取り組みも行っています。

その取り組みに対して、平成22年度は入学説明会を5会場で実施しました。ここでの参加者が184名。オープンキャンパスは、7月下旬で457名、11月で328名となっています。公開講座、中学校への出前授業、学生募集説明会、これは中学校の先生を対象としたものとなっています。そのほかに進学個別相談会を実施しました。

WebサイトのQ&Aを活用していろいろな意見を集め、それを反映させています。

高専ブランドプロジェクト「地域元気！輝け、明日の女性技術者！」といった活動も実施させていただきました。

それに基づき、今年度、平成23年度では、継続的に入学説明会、学校見学会、公開講座等を実施していくということです。一昨日、昨日と2日間、本郷キャンパスで実施し、本日から3日間、射水キャンパスでオープンキャンパスを実施します。両キャンパス合わせて700名ぐらいの参加があります。

引き続きWebサイトの充実、女子学生の活動や卒業生の活躍をホームページを通してPRすることを継続的にやっていく予定です。

③は広報物の有効活用の検討ということで、先程説明したこの3つの広報物を作成させていただきました。これを県内の全中学3年生、近隣の中学3年生、及びいろいろなイベントのときに活用させていただいています。

今年度も継続的にこの事業を進めていきますが、さらに新しく、志願者対策／広報用DVDを作成するための検討を今年度から開始します。

④については、他高専との協力、入試制度の検討ですが、昨年度は、東京の会場を関東地区高専と5商船の共同試験会場として実施できないか検討させていただきました。射水キャンパスは商船学科がありますので、東日本に受験地があります。そういうことから、いろいろなところで共同でできないだろうか、あるいは中部日本海共同PRという形で、東海北陸という枠ではなく中部日本海といった地域での活動もやっています。一番大きな点は、平成24年度入試から本科の入試方法を併願制に統一することを決定しました。その実施に向けて準備しているということです。

これに基づき平成23年度は、他高専と共同して遠隔地での学力試験が実施できないか継続的に検討するとともに実施可能な会場から実現する。東海北陸地区及び中部日本海で高専のPRを行うということです。平成24年度からキャンパスの統一入試ということで、確

実に実施するための準備を行っています。

最後、⑤ですが、実質競争倍率は先程の数値目標と同じですが、本校では人数というよりも受験倍率、実質競争倍率を1.5倍以上確保することを挙げました。

これに基づき平成22年度は、実質競争倍率は2.1倍で1.5倍以上を確保したということです。

平成23年度も当然それに基づいて実施していくということですが、さらに中学校に教育活動等をきちんと説明するための取り組みも実施していく予定になっています。

簡単ですが、入学者確保については以上です。

【遠藤議長】 時間の配分もありますので、全部続けてお願いします。

【本江教務主事】 「教育課程の編成等」につきまして、2/10ページをお願いします。

こちらと同じような構成になっていまして、①については、新教育課程を着実に定着させる、学科構成等の検討を行うということで、平成22年度、新設の6学科の原級留置や単位追認試験の基準の整備を実施しました。

専攻科の高度化ということで、教育設備の充実、国際会議に向けた英語アブストラクト作成講座等を実施しました。

専攻科生につきましては、PBLという教育手法を、学内だけではなく海外に向けても展開していくことを実施しました。

専攻科におきましては、本校独自で学位を出すことができません。学位授与機構に申請して学位を取得することがありますので、専攻科生に向けて、小冊子「専攻科生のための確実な学位取得を目指した安全な学習レポートの作成」を作り学生の指導を行ってきました。

今年度は、継続的に、新教育課程を確実に実施するために整備をする。そして、高度化ということで、専攻科と本校に設置してある地域人材開発本部と連携し、さらに教育の内容を充実させる予定になっています。

②です。新たなカリキュラムを確実に実施するとともに、改善の方向性について検討する。専攻科において、エコデザイン工学と新しい分野である国際ビジネス学を設置し、新たなカリキュラムを実施していくということです。

平成22年度につきましては、新教育課程として、特に工学系の共通科目として、ものづくり基礎工学実験を実施しました。実際に実施しながら、問題点や効果等について検討しました。

エコデザイン工学専攻及び国際ビジネス学専攻の教育課程、特に融合分野や海外インターンシップを着実に実施したということです。

実施するだけでなく、自己点検評価委員会のもと、機関別認証評価、J A B E E、S T C W等の作業を開始しました。

前後期の区分を明確にするということで、夏季休業時期の変更に対する検討を実施しました。

これに基づき平成23年度では、社会ニーズに合った学科の再編成の検討を開始しました。2番目につきましては、本校が持っている海外の提携校と海外留学及び異文化実習をさらに効果的に実施するよう計画しています。

③は、教育課程の基盤科目である数学、物理、英語をさらに充実するという事です。

平成22年度におきましては、全国高専共通で工学系及び商船系の7学科の3年生を対象に学習到達度試験を実施し、その結果に基づき教育を行うということです。また、T O E I C、工業用英検、実用英検の単位化、受検の推進を行ってきました。

今年度、それらは当然継続しますが、新たに低学年の成績不良学生について数学プラス物理も補講を実施していく計画を立てています。

④については、授業評価アンケートを教務委員会を中心に実施しました。教員相互のピアレビューもF D委員会を中心に実施しました。

平成23年度も継続的に実施しますが、さらに教育改善に向けたことを実施していく予定です。

⑤のスポーツあるいはロボコン等のコンテストの支援ですが、22年度においては、陸上、バドミントン、柔道ですぐれた成績を残してもらいました。ロボットコンテストについても全国大会に参加し、ベスト8といった優秀な成績をおさめました。英語のプレゼンテーションコンテストでも全国大会へ出場権を獲得しました。このように、平成22年度ではスポーツなどの全国的な競技会やコンテストに学生が多く参加しました。

平成23年度は継続的にこれを推進していく予定です。

⑥のボランティア活動、社会活動として、平成22年度は新入生の合宿研修やスキー合宿研修を自然体験活動を兼ねて実施しました。またボランティアとして、学生160人が海岸の清掃を行いました。さらに、献血あるいは全国高専大会の運営スタッフ、寮生におきましては近隣の清掃等を実施しました。

平成23年度は継続的にこれを実施していく予定になっています。

以上、「教育課程の編成等」について説明させていただきました。

【遠藤議長】 引き続き、「優れた教員の確保」について、米田先生、お願いします。

【米田校長】 私の方から説明させていただきます。

3/10ページをご覧いただきたいと思います。

採用人事は公募にするようにとの全体の目標があつて、それに従い公募でやっています。ポイントとして、博士の学位を有する人、他機関での経験を有する人を採用するように心がけているということです。

②ですが、長岡と豊橋にある技術科学大学とは高専全体が強く連携していることもありまして、長岡技術科学大学はアドバンスドコース事業を実施しており、そのモデル校にもなっていることがありまして、協力をしている。それに伴い教員の人事交流も、これは23年度ではありませんが、考えています。人事を行う際の基準もしっかりしたものを整備するよう検討しているということです。

博士という話をしましたが、技術士の資格も博士の資格と同等に扱うこととしています。そのようなことが③に書いてあります。

本校は女性、学生も比較的多いのですが、女性の教職員も多い方の学校になっています。そのために、環境整備タスクフォースを設けて、女性の教職員、女子学生も含めて、環境整備について前向きな検討をしています。

教員の資質向上のために、FD委員会を設けてFD活動も積極的に展開しています。

教職員の表彰制度も作りまして、それによってインセンティブ、モチベーションを高めるような努力もしています。

かいつまんで説明しましたが、このように教員を確保し、確保した教員の資質向上のために努力している計画になっています。

以上です。

【遠藤議長】 引き続きまして、「教育の質の向上及び改善のためのシステム」についてお願いします。

【本江教務主事】 3/10ページの一番下からになります。

「教育の質の向上及び改善のシステム」ということで、新教育課程の実施と改善、教育方法の開発ということで、工学系、人文社会系、商船系の3分野の融合を図る新教育課程を実施し、定着しました。

平成23年度では、それを確実に実施していくことと、新たに環日本海ビジネス交流にか

かわる実務者からいろいろな報告会等を実施するという事です。

本校では今、専攻科と本科の夏季休業期間の時期がずれていましたので、これを統一することで今検討を進めています。

4/10ページに入らせていただきます。

②は資格取得、J A B E E のことですが、新カリキュラムに合わせた資格の取得を推進する。そして、それを単位に認めることを検討、実施しました。

自己点検評価委員会において J A B E E 専門部会を設け、こちらを平成22年度実施させていただきました。

平成23年度は、これを継続的にさらに充実させることで実施していくということです。

③の学生の交流ですが、これは学校間あるいはキャンパス間の交流を実施させていただきました。平成22年度では中部日本海共同 P R サイトを立ち上げ、これに基づき学生の交流あるいは留学生の交流等を実施していくということです。それについては、細かく中に書いています。

両キャンパスの学生が交流するために、カッターレースの参加、学園祭、合同球技大会といった行事を実施しました。

平成23年度も継続的に実施していく予定です。

④につきましては、総合データベースを活用し実践例を収集するという事です。

こちらにつきましては、平成22年度、東海北陸地区国際教育研究集会等を実施し、各高専のすばらしい取り組み事例を紹介していただいたり、F D 研修会において業績のすぐれた教員に来ていただき講演会を実施しました。

平成23年度についてはさらにこれを充実していく方向です。

⑤については、大学評価・学位授与機構による認証評価に適合する教育課程にすることで、自己点検評価委員会のもと点検事項を定め各部署で行う。そして、本日、ここでご意見をいただくという形で運営諮問会議を年2回開催させていただいています。

平成23年度についても継続的に実施していくことになっています。

⑥については、インターンシップ等あるいは地域産業界との共同教育を推進するという事です。1番目のインターンシップですが、富山県インターンシップ推進協議会に参加し積極的に実施しました。昨年度は、4年生ですが、約65%の学生が参加しました。さらに、海外のインターンシップを実施する。あるいは、本校技術振興会と共同で企業に望まれている社会人基礎力を持った人材を育成する講座も開催させていただきました。

平成23年度はこれをさらに充実するとともに、特に技術振興会の人材育成については、社会のニーズを調査しまして、今年度から体制を変えて新たな人材育成プログラムを実施する予定になっています。

⑦については、退職技術者を含む企業人材の活用という形で、昨年度は退職技術者の実態を調査させていただきました。また、客員教授やシニアフェローを任命し、本校の授業に積極的にかかわっていただいたということです。

平成23年度はさらにそれを強化したいと考えています。

5/10ページですが、平成22年度は長岡技科大との連携を強化しました。これはアドバンスドコースという事業ですが、本校の学生が進学後の技科大単位を高専在学中に先取りするといったことの検討を実施しました。豊橋技科大の学長にも訪問していただき、いろいろな情報交換を行いました。

平成23年度については、アドバンスドコースをきちんとやることもありますが、特に商船学科や国際ビジネス学科が両技科大に編入学できるような協議を進めることになっています。

⑨はeラーニング等の充実ですが、平成22年度から充実を開始しています。

平成23年度は、さらに海外留学の事前学習や異文化実習事前学習にも取り入れたいと考えています。

簡単ですが、以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

それでは、「学生支援・生活支援等」について川淵さんからお願いします。

【川淵学生主事】 私から説明いたします。

ご存じのように、高専は中学校を卒業してから、ですから15歳になってから入ってくるといったシステムです。かなり多感な時期を過ごすということで、数々の難しい問題があります。その一つに心の教育について、まず中期計画に書いてあります。

中学校卒業直後の学生を受け入れる、かつ相当数の学生が寄宿舍で生活するといったことを踏まえて、メンタルヘルスを含めた学生支援・生活支援を充実しなければいけないということです。そのために、まず受け入れる教職員側で、メンタルヘルスを含めた学生支援のあり方について講習会を実施しそれに参加させる。学生、保護者が相談しやすい相談体制を整備する。福利厚生施設など学生の生活環境の充実を図ることが挙げられています。

本校には学生相談室というのがありますので、その活動を充実させる。職員に講習会に

行ってもら。いろんな高専からのそういったメンタルヘルスを含めた学生支援体制についての情報を集める。

高専機構にはK O S E N健康相談室というのがありまして、このことを保護者の皆さんに周知する。

また、学生会というのがあります。両キャンパスの学生会から本校の福利厚生についての意見を言っていただき、それを取りまとめて参考にする。

そのほかにも、学生との懇談会を行い直接意見を聞く。

生協というのが3年前からできています。生協にも理事として学生を入れています。そういったことから、要望を反映させるために意見を聞くということです。

そういった22年度の計画に基づき実施しています。

資料2の32ページをご覧ください。学生相談状況、これは22年度のものですが、本郷キャンパス、射水キャンパスに分かれて書いてあります。

まず本郷キャンパスの合計を見て下さい。保健室と相談室に分かれていまして、保健室の中にもメンタル相談件数と疾病等件数に分かれています。本郷キャンパスでは学生が547、教職員が189という数字が挙がっています。教職員189というのは多いと思われるかもしれませんが、これは自分のクラスの学生に対して保健室で相談するのも含まれています。ほかに、先生方で運営している相談室に来る学生、本校に来ているカウンセラーの方に相談する件数も含め、学生が198、教職員6という数字が挙がっています。

射水キャンパスにもそういった傾向が見られます。保健室の学生のメンタル相談件数が600。教職員はありませんけれども、相談室では学生が17。

メンタル相談が両キャンパスとも多いことがこれで分かると思います。

戻っていただきまして、資料1の5/10ページですけれども、これらを踏まえ実際にやったことが、平成22年度の年度計画の実施状況というところに細かく書いてあります。いろんな相談を受けたり、いろんな講習会を開いたり、ホームルームに心理講座を開いたりといった努力をしています。

学生の様子を知るために、Q Uアンケート、学校生活サポートテストもしていろいろと参考にしています。

平成23年度につきましても、継続的にそれらを進めていくことになっています。

②については、図書館の充実や寄宿舎の改修などの計画的な整備を図るということで、やはり学生に自主的に勉強していただきたいので図書館の充実と。生活の場である寄宿舎

の整備を図るということで計画を立てています。

実際やったこととして、資料2の33ページに、これまでの状況等が細かく載っていますので見て下さい。

35ページですが、学生を書店に派遣し、自分の希望する本を買ってきてもらうというブックハンティングを行い、自分たちが欲しい書物が手に入るような努力もしています。

寮については、両キャンパスとも同一の委託業者にして、節約や環境整備を図っています。

③については、授業料の免除制度や各種奨学金制度の積極的な活用を促進するため、学生や保護者へ情報を提供する体制を充実させることになっています。やはり経済的に今大変なときでもありますので、そういうシステムをなるべく使ってほしいということで周知しています。

④は、就職支援、進学支援ということで、そういう体制を充実させています。

これも資料を見ていただければわかりますが、就職はほぼ100%内定しています。大学も、幾つか受けて自分の行きたいところに行っているといった状況です。

最後、少し短くなりましたけれども、以上です。

【遠藤議長】 貴重なデータを幾つか報告していただけたかと思います。ありがとうございました。

最後に、「教育環境の整備・活用」について成瀬副校長よりお願いします。

【成瀬副校長】 設備整備及び施設整備に関しましては、4年から5年の中期展望に基づいたマスタープランを策定してしまして、年度更新に従い修正を行いながら行っているところです。

今お話ししているのは①、②ですが、具体的には、射水ではランゲージラボを更新したり、両キャンパスでは図書館情報センターを設置して改善に努めているところです。

エコアクション21ですが、本郷キャンパスでは既に認証されていますが、今年度から射水キャンパスでも認証に向けて活動を開始しました。

③は、学生・教職員の健康管理・安全管理についてですが、大元は危機管理委員会を中心に活動していますが、具体としては、ハラスメント防止委員会、学生委員会、安全衛生委員会、FD委員会でそれぞれの活動を行っています。これに関しては昨年度と同様な活動を今年度も行っていて、安全衛生委員会では救命救急講習会を開く、年2回の学内の施設のチェックを行う。ハラスメント防止委員会も引き続き研修会等を計画的に行って

いるところでは。

また、業務改善に基づき幾つか検討を行っていきまして、今年度も引き続き充実を図ろうと思っております。

以上です。

【遠藤議長】 教育に関する6項目についてご説明をいただきました。

質疑も含め、それぞれ皆さんからご意見をいただきたいと思っております。

項目ずつに、あらかじめまとめたご意見を各委員の方からいただけるようお願いしておりますので、それを最初にいただいて、その上でフリートキングをしていきたいと思っております。

最初の「入学者の確保」については、坪池委員からコメントをお願いしたいと思います。

【坪池委員（代理）】 県立高校においても同様に体験入学などは実施していきまして、最近の状況は、学生数は減っているのですが、希望者がだんだん増えてきています。つまり、1人が2校、3校と行く。いろんなところを見て選んでいる状況があります。もう1つは、少し広い範囲の学校まで見てやっているような状況があります。

そういう意味では、自分の行きたい学校を一生懸命探そうという意欲がありまして、そういう子たちにとっては、高専も一つの選択肢として、意欲的にいろんなものにチャレンジしてみようという気持ちがあるのではないかと考えています。そして非常に効果があるとも伺っています。

併願制のことですが、これはこちらの方ともかかわってきますので非常に難しいのですが、合格発表の時期をできれば県立学校の志願期間の前にお願ひできればと思っております。両方受かって好きな方を選ぶという、それはそれでいいと思うのですが、それを決して否定するものではありませんけれども、高専を第1希望にして県立高校を第2希望としている場合に、結果が出ていれば受験料を重ねて出す必要もありませんし、こちら事務手続的なことありまして、追加を出すようなことがありますので、その辺は調整していただければありがたいと思っております。

実質競争倍率が2.1倍というのはすごい数字だと思っております。県立高校も学ばなくてはならないことがたくさんあったと感じています。

以上です。

【遠藤議長】 つながると思うので、「教育課程の編成等」も含めてお願いします。

【坪池委員（代理）】 ちょっと質問させていただきたいのですが、新教育課程というのは、

高校でしたら、学習指導要領が変わるので新教育課程というのがあるのですが、高専の場合は教育課程という何かの縛りがあるのでしょうか。新しいというのはどういう意味ですか。

【本江教務主事】 旧工業高専、旧商船高専の学生がいまして、そちらが今両方で8学科あります。こちらを旧課程と言っています、統合後、今入学したところが6学科で編成していますので、そちらを新課程と記入させていただいています。

【坪池委員（代理）】 わかりました。

私ども学校訪問の機会に県立高校を見ていますけれども、工業の授業が非常に素晴らしいなと思っています。普通教科の積み上げからいくと、子どもたちにはとても理解できないようなことを、体験やいろんな実験などを通じて、非常にレベルの高い概念をいとも簡単に理解させてしまうことがありまして、そういう意味では、工学系の授業というのは素晴らしいなというのをまず印象として持っています。

普通科から4年生大学へ行くことを考えますと、どうしても専門的なことが後になることがあると思います。県立高校の中で比較的近いのは、看護科の5年一貫ではないかと思っています。専門的な内容を早い時期に学ばせる意義というのは大変高いと思っています。人間には臨界期のようなものがあって、感性豊かなときにいいもの、本物を学ばせるという意味があると思っています。

そういう意味では、県立高校や普通の高校とは違う教育課程でそういう特色を出していただいて、お互いが切磋琢磨できて、将来的に競争して素晴らしい人材育成ができればと思っています。

以上です。

【遠藤議長】 併願と発表時期の事項は大学入試でも同様に悩ましいところですね。学生第一に考えたいとは思いますが。

【坪池委員（代理）】 そう思うんですね。

【遠藤議長】 そういうことですね。1つの課題として、本日はこれ以上触らないことにしましょうか（笑）。

【坪池委員（代理）】 決して併願を否定するものではなくて、両方受けてもらって好きな方を選んでもらえばいいのですが、仮に高専を第1希望にしている生徒にとっては重ねて受ける必要がないと。迷っておられる方は両方を受けられればいいと思いますけれども、といった程度のことです。

【遠藤議長】 わかりました。

【梅田委員】 申しわけありませんが、途中で中座しなければいけないものですから先にちょっと。

【遠藤議長】 では、全体を通して、また梅田委員には「教育の質の向上及び改善のためのシステム」のところでコメントをお願いしようとしていましたので、全部含めてありましたら。

【梅田委員】 私、あまり出ていないのに、今日ぐらいは出なければと思って来たものですから一言だけ。

大分前から参加させていただいているのですが、時を追うごとに、私自身、すごく充実感が感じられます。というのは、職業に必要な実践的かつ専門的な知識及び技術を有する創造的な人材の育成という観点から、先程も遠藤先生がおっしゃいましたが、本当に大学よりも密の濃い感じだなと。

企業側として、私どもは毎年のように採用しておりますので、その中で全体的に、うちは大体200人という小さい規模の中で、新卒で年に10人や15人ぐらいの中で、もちろん院生もいますが、中身というか実践的かというと本当に役に立つ、女性も随分しっかりしているので、随分先生方は教育に力を入れていただいているのだなということをまず感謝申し上げます。

今こうやって中身を拝見していて、2年前、3年前から見ると随分変わったなというのが実感として感じられました。

ということで、すみませんけれども、失礼します。

【遠藤議長】 また、現場から見た目でいろいろご意見をいただきたいと思いますが、本日は大きな評価をいただくことができました。

【梅田委員】 本当にびっくりしました。

【米田校長】 斬新なご意見をいただきたかったです、どちらかというとお褒めの言葉をいただきまして、ありがとうございます。

【遠藤議長】 梅田様。お忙しいところ、ありがとうございました。

【梅田委員】 すみません。本当は今日一日富山にいるつもりだったのですが。

【遠藤議長】 今、高専にとっては教育ということが一つの大きな課題だと思うのですが、入試あるいは教育体制の2つは重要だと思いますので、もうちょっと時間を取りたいと思います。(梅田委員 退室)

今、坪池委員から意見をいただきましたけれども、この辺の、いわゆる入学生、そして教育をどうするかという点においてはいかがでしょうか。

松坂委員、先程ご質問いただいたことは一応答えが出たと思います。

【松坂委員】 あれは答えていただきましたので、どうもありがとうございました。

学校が大変変わったと今お話を受けたのですが、私がつい最近感じたことは、皆さんご存じだと思うのですが、7月16日に横浜で進学ガイダンスというのを5商船でやりました。

このときのことなのですが、実は去年は、我々の学校は来られた人たちが一人もいらっしやらないような感じだったのですが、今年はとても準備がよくて、また学生の応援もあったりして、今回は来られた方々を本校がひとり占めしてしまいまして、周りから非常にやっかみを受けたぐらいで、しかもそのプレゼンテーションも、素晴らしい準備と素晴らしい映像でやっていただいて、卒業生として本当にうれしく思いました。

そんなこともうんと変わったことだなと感じました。

【遠藤議長】 それはかなり広いスペースで、5商船の代表が集まった場ということですね。

【松坂委員】 日本丸訓練センターでやったのですけれども、もう圧倒的な、ほとんど全員が来られて、ほかの学校は1人か2人、ない学校もあったぐらいでしたから、見上先生にでもお聞きになればそのときはわかると思います。

【遠藤議長】 スペシャルなフィールドですから、そのような活動はなお大事なのではうね。

【松坂委員】 とても映像が、ITとかそういうことをきちっとやっておられるから、そういうことがものすごくうまくできるんですね。参加した4人の学生もそういうことをちゃんと理解していて、機械の操作にしろお話しにしろ、本当にすばらしかったです。

【遠藤議長】 工学系から見て、石塚委員、何かコメントはありますか。

【石塚委員】 よくやられていますよ。

【遠藤議長】 フィールドが重なることもあると存じますが、いかがですか。

【石塚委員】 私、実は今ドクターを1人、ここの出身で、農工大に進学して戻ってきた子を1人抱えています。これも優秀なのですけれども、実は2年前にコーセルの人にドクターを与えたのですが、その人は富山高専出身だったので、当時は大学を出ていないということで、今はできるのですけれども、放送大学に2年間入ってもらって、修士を飛び越えて、博士課程に入り2年前にコーセルで初めての社会人ドクターになった。

その人は極めて優秀で、電気出身だったのですけれども、私は電子機器の冷却というテーマをもっていたので、熱に関するテーマで学位をとってもらいました。ある意味、社会に出て研究すればそれなりのものが得られるというのは、それは県立大学のステータスでもあるし、高専の方も、出口保証というより、もっと飛び越えて、そういう意味の将来もあるのだということで宣伝に使ってもらえれば、お互い、私の大学も高専も助かると思う。また、その人が専攻を出ていてくれればもっと楽だったのですけれども、それでも極めて優秀でした。

ただ、私の場合、幸か不幸か、優秀な子しか見ていないので、高専で優秀でない子がどの程度の子かというのがわからないのですけれども、ただ、一言で言えば、設計力はかなりありますから、これは今まで以上にやっていただければ、良いと思います。県立大学も今、設計が弱いので学生をしごいていますけれども、やはり高専の人の方が設計力をかなり勉強している。

【遠藤議長】 先生、設計力というのはどのようなことを指すのでしょうか。……愚問で申しわけありません。

【石塚委員】 機械ですと、例えば物を作れと言ったときに、どの程度の力を加えるとか、どの程度の形が一番いいかを考えて、それを今度図面に書いて、だから設計と製図という意味です。それがダメだと作れませんから。

ついでに、多少辛口に、辛口でも別に批判ではないのですが、ロボットコンテストをよくやられていますね。県立大学でもロボットコンテストに出る人達にも批判めいた事を言ったのですが、日本のロボットは世界最高水準だったのに、原発の事故では何の役にも立たないわけです。これは遊んでいたり研究だけやって役立つロボットをやらないからダメなのであって、ホースを投げるなど単純な作業でもいいのです。結局、そういうロボットをやらないから。

確かに1個のセンサーなどを動かす技術は世界トップクラスなのですけれども、システムをやってほしい。もちろんこれは教育だから、興味を示すという点ではものすごくいいのだけれども、せつかく高専さんがやるなら、テーマが与えられたらしようがないのだけれども、やはり高専らしい、大学とは違った、さすがだなというのを、時代を先取りしたものをやってほしいというのが希望です。

【遠藤議長】 そうしますと、高専の独自性、特徴、利点を生かした、いわゆる何をやるかということと、プラスどういう人材を育成できるかに期待がかかる。

学生の立場からはどのようなアウトプットがあるのかが極めて重要と感じます。高専もどんどん様変わりしてきているわけですが、大学へ進学するのか、企業に入るのか、この辺のバランスとといいますか、その辺のアウトプットに関しては、いろいろデータを出していただいていますけれども、本質的に高専どのように目標を設定して教育を組んでいらっしゃるのでしょうか。大学へ移行というのが主体になってくれば当然、視点も違ってくるのでしょうかけれども、基本的な方向性はどちらに行っているのですか。

【米田校長】 基本的な方向性は、何回も出ていますが、創造性に富む実践的技術者を育成する機関である、これが原則です。

ただ、その後、専攻科もあるのでありますが、大学の3年に編入したいという希望も確かにありまして、その希望の方がだんだん大きくなってきて、比率的には平均で、編入で大学3年に進むのが、例えば本校の場合は5割を超えています。学校によってはそれがもっと高い比率もあるし、そうでないものもありますが、より高度な技術者になりたい人たちは大学で学ぶ。

そうしますと、石塚先生が言われるように、歩けるかどうかを事前にチェックしないとASIMOを歩かせないというのではだめで、やはり実践的というのはそういうことだろうと思います。

そういう意味では、高専は実践的な技術が身につくような教育体制をとっている、またそれに近づいていると思います。

【遠藤議長】 私は医学系ですが、今の学生諸君は、覚えること、学ぶことが多過ぎて、現場力がどんどん落ちてきている。極論ですが、医学知識はあるのだけれども、自分でものを考えて患者を診れない医者が増えることを心配しています。

現場力をどう生かすかというのが非常に大きいと思います。例えば高専が技術に優れた人をできるだけ若いうちから育てるとなると、社会の受け入れ側も、高専の卒業生をもっと高く評価できるような体制であって欲しい。

その辺で、正橋さん、いかがですか。

【正橋委員】 当社に限って言えば、高専卒の方も二十歳で入られるので、あからさまな話、待遇面は、はっきり言って短大の方と最初は変わらないような設定にしているんですね。会社によっては違った体系のところもあるかと思いますが、そういう意味では、私どもの企業にとってみると、まだ変化の認識が低いというか、そういう反省点はあるのかなと今日感じました。

そうではあります、今年の内定者の中には、実は高専を卒業されて、阪大に行かれて、院を出られた方も入社していただけることになっているので、今出てきた現場の技術力にプラスして、さらにそれをまた研究で突き詰めていきたいという学生がたくさん出てきてほしいなと思います。

現場力があるのはあるのですけれども、やはりベースとなる学力をしっかり積み上げていかないと、企業としても、次のステップに進む人材としてやっていける人をたくさん欲しいと思っていますので、そういった部分では、高専を一つのステップとして、たくさん上へ行っていただければと思っています。

【石塚委員】 私は東芝に19年いたのですけれども、東芝ではどのように扱ったかといいますと、短大の女の子は高卒に2年プラス。高専を出た人は大学よりも2年少ない。高卒に2年プラスと大学より2年マイナスは、給与体系が違うので給料が微妙に違うのです。

だから、一応それなりに学卒に対抗していたのですけれども、もともと高専は、2年短くても大学と同等の力を持つということで作ったんですね。確かに力はあったのです。僕は覚えていますけれども、1期、2期、3期というのは優秀な人が行って、企業の人に聞いたら、阪大の大学院生がインターンシップしたときよりも優秀だったと言っていますから。それが5年したらこんなに下がってしまったのかというくらい。

でも、ちょうどそのころと大学が4年生から大学院に移行するのと時期が同じで、大学院生と高専の方を当時比べていたのです。だから、何年かすれば差が出てくるのは当然なので、作るときの国の政策と微妙にずれたかなという気がします。

でも、今こそ長い目の教育ということを言っているときに、高専の存在というのは大きいので。ただ、先程僕が言わせてもらったのは、もしかしたら数年たつと、基礎力という点で大卒との差が出てくる可能性がある。遊んでいますけれども、多めに1日や2日勉強していますから。そうすると、その後、企業で一生懸命やった人が研究意欲が出たら、それをこちらが受け皿としてやれば、さらにプラスしてやるというチャンスが出てくる。それで閉じても大卒と同じ力を持つというよりも、あるマイルストーンとして高専の卒業を考えていただいて、それから企業に入って力を蓄えていただいて、研究マインドが出てきたら、またそれを足がかりに動かしてもらえば、私は高専の生き残る力というのはまだ十分あると考えています。

【遠藤議長】 そういう意味では、ポジティブに考えたら、先生がおっしゃるとおり、いろんな形が今作れるようになっていて、学生は、逆に言えば中学時代から選択肢を悩むの

でしょうけれども、幅広く構えながらやっていける。しかも高専は、文科省がついていて、独立行政法人で、全国的な大きな組織として動いている。

一方、現実的な課題として、学生へのアプローチに比べ会社関係に対する高専の様変わりしている現状と幅の広さといいますか、その辺の宣伝が不十分なのではないでしょうか。まさに石塚さんがおっしゃった待遇改善ということをもっと国あるいは各高専として訴えていくことも必要と存じます。

【石塚委員】 梅田先生がおっしゃったように、はっきり言うと、大学卒は一人前になるのに3年から5年かかるんですよ。その間、多分高専の方は1年ぐらいで一人前になるだろうから、そこに入って、なおかつもっと勉強したいと思ったら、また教育機会はあるので、また伸ばしていただくということではないかと僕は思っていたのですけれども。

【遠藤議長】 そういう意味では、梅田先生がおっしゃっていましたが、私も今回高専の今のすばらしさも、変わりつつある高専の良さというところも、社会全般の受け入れは不十分と思います。当初のよかった時期は私も知っていますが、その後の評価は中途半端になっているようで残念です。

【石塚委員】 1期生はものすごく優秀だったらしいですね。

【遠藤議長】 私、ちょうど1期生のとき普通に高校に行かないで、最初から高専へと進学した優秀な同級生が多くいました。

【石塚委員】 僕は沼津高専の1期生と同期ですが、中学校の優秀な人がみんな受けに来て全部落ちてきましたから。

【遠藤議長】 話は変わりますが、今大学で学生に、インターンシップで海外に行っていくと言っても、なかなか手を挙げる学生がいらない。それなのに、高専の皆さんは、公募をかけたらず員が出ることがないというんですよね。これは素晴らしい。

【石塚委員】 ちょっと質問させて下さい。費用は全部自分持ちなのですか。

【米田校長】 いろいろです。高専機構が幾つかの会社の協力を得て海外インターンシップを実施するのですが、それに手を挙げさせると、当然、定員よりもたくさん手を挙げます。

【石塚委員】 北アイルランドなど、アイルランドは結構お金がかかるように思う。

【米田校長】 自分持ちではなくて、会社の協力で。

【遠藤議長】 国はどこまで……？

【米田校長】 そういうものもありますし、また自分や親が出すものもあります。だから、一口に海外インターンシップと言っても、いろんなタイプがあります。保護者が出す方法でも結構手は挙がる。

【遠藤議長】 そういう点ではすばらしい。

【米田校長】 先生、ちょっと戻ってよろしいですか。高専制度ができたころの高専生は大変優秀な人が多かった。平均的には、年を経るに従って、いわゆる意欲的なものはだんだん拡散して下がりますよね。そういう中であって、今外国から高専に留学するのも含めて、やはり学位を取りたい人が多いと思うのです。それが、高専を出てからどこかの大学の3年に編入して、そこを卒業すると学士の学位がもらえる。

そのときに、高校から大学へ入るというルートがあるから、高専がバイパス的なものであれば要らないのではないかという議論も実はあった、あるいはあるやに聞いていますけれども、やはりそうではないと。鉄は熱いうちに打てということで、高専から技術者として仕上がるのが早いというものもありますけれども、同じ学位を目指すにしても幾つかのルートが、「複線化」と言っていますが、高等教育機関を有している国としては複線化を持っていることが大事なのではないか。どこかの国ではないけれども、1つのところにたどり着くまでに道が1本しかないというのはよくないと思います。

そのようなことで、複線化の一翼を高専は立派に担っている。学位を取ることに限って言っても。ただ、実際、学位を取ることが目的ではもちろんなくて、先程言った実践的な創造性に富む技術者が育つことが目的です。

【遠藤議長】 わかりました。それは非常に重要で、幅広く対応を考えていただきたいと思います。

もう1つ、先程ちょっと私が言いかけたのは、インターンシップでなぜ海外云々と言ったかということ、今の日本の経済状況から言えば、これからの企業はもう海外に行くしかない。特に理工系の工学系は。となったときに、人材的に言うと、平気で海外へ飛び出していく連中をどう育成するかが重要な課題となります。

残念ながら大学教育の中では、そういうアクティビティーが落ちていることを感じます。その点で高専には手を挙げて行く若者が多いという話は極めて魅力的です。その辺は高専側はどう考えられているのでしょうか。

【米田校長】 これは国際性の向上といえますか、いいことか悪いことかわかりませんが、日本の産業界は、特にものづくり関係が海外展開するような方向にありますよね。そうす

ると、そこで頑張ってくれる人もあわせて育てたいという認識はあります。

また、「留学生30万人計画」もありまして、来るだけではなくて、こちらからも行く、そのようなものも目標の中に入っています。

【遠藤議長】 こちらから行かないことにはどうしようもないですよ。

一番重要なポイントだろうと思ってちょっと時間を取りましたが、では次の話題に行きます。

「優れた教員の確保」についてですが、高専ではいろんな具体的な実績があり、また、いろいろな評価をされながらやっていたらっしゃるので、これはすばらしいことと思います。

ただ、これは個人的意見ですが、公募制に関しましては、時として、高専独自あるいは特徴のある教育体制を敷いていこうとしたときは、ターゲットを絞って、この人を採用したいといった選考の仕方もあっていいのではないのでしょうか。全てを単に公募制というのではなくて、目標に合った教員を獲得するのも重要と思うのですが、いかがでしょうか。

【米田校長】 テクニックとして参考にさせていただきたいと思います。

【遠藤議長】 もう1つ、さまざまな形でインセンティブをつけていらっしゃいますけれども、例えば検証してみたり、学会等の活動を支援したり、この支援の具体的なものといえますか、お金はどこから支援されているのですか。教員を鼓舞するために、表彰制度などいろいろ作られているようですけれども。

【米田校長】 一つは、校長裁量経費というものがあまして。

【遠藤議長】 予算は幾らぐらいお持ちなのですか。高専の運営交付金が約24億。これは富山大学の予算より多いのではないかというひがみがまず入っていたので……やめまじょうか（笑）。

【米田校長】 はい（笑）。そういう少し融通のきくお金を使ってインセンティブを与えている。

【遠藤議長】 でも、それが校長裁量経費ですものね。

【米田校長】 はい。

【遠藤議長】 教員採用に関して、皆さんいかがでしょうか。

【石塚委員】 遠藤先生が言われたように、公募だからといって、必ずしもいい方が来るとは限らないという気がしないでもないですね。タイミングがいいと、いい方が来る。結局、ほかの大学を受けて落ちた人が来る可能性が極めて高いので、遠藤先生がおっしゃるように、高専さんは高専さん独自のルートを作っておけば、企業でも優秀な人は有名大学

に行ってしまうので、初めから作っておいた方がいいのではないかという気がしないでもないです。

【遠藤議長】 そうですね。全部指名制にしてしまうと、また弊害が出てまいりますからね。

【石塚委員】 公募といっても、大学の学内に書けばいいのでしょうか（笑）。

【遠藤議長】 そのテクニックはお任せすることにして。

【米田校長】 引き続き先生のテクニックも参考にしたいと思います。

【遠藤議長】 国立大学もそうですが、公募といっても最後の選考は独自の基準で決められればいい。どんな方が出てくるかわかりませんからね。想定した以上にいい人が来る場合もある。それが公募の一番のメリットなのですけれども。

【米田校長】 その可能性を最初から配慮するのはだめだと。

【遠藤議長】 だめです。やはり選ぶときの基準が一番問題でしょう。ややもすると、国立大学は論文の点数だけで決めてしまって、現場の実力度を全然評価しないまま決めていく。

【石塚委員】 それでやると、教育がおろそかになることが多い。

【遠藤議長】 そのとおりです。

【石塚委員】 要するに、極端な話、大学運営に興味がないという先生が来られると困るわけですので。

【遠藤議長】 いますね。学校に来ないという先生がいますからね。

【米田校長】 高専にはそういう教員はいません。

【石塚委員】 それはそうでしょうね。

【遠藤議長】 いろんな話を自由にさせていただいてすみません。

この辺、教育の質の向上及び改善のためのシステム等々を含めまして、坪池委員、さらに何かコメントはございませんか。

【坪池委員（代理）】 重ねて話すことになると思いますが、私は外から見ていまして、初期のころの高専に対する社会的な要求と今日的なものと少し違うように思うのです。教育社会学の方では、リカレント教育になっているとよく言いますが、社会がだんだん複雑化すると、勉強しなければならない期間がどんどん長くなって、極端に言うと、50歳まで勉強して10年働くといった時代が来るのではないかということがよく言われます。

学校に拘束される期間が長くなると、身につかないものがどうしても出てきてしまうと

ということで、今、インターンシップなどさまざまなことが言われているのだと思うのですが、学問の方でも基礎的なことからやって応用という考え方はもう通用しなくなってきたと思います。

そういう意味では、早めに専門教科をさせて、うまく動機づけしてやっていくという、その組み合わせをどうやっていくか。ここまで基礎をやって応用というのではなくて、応用と基礎を同時に走らせていくことができればいいなと思いますが、如何せん、それは県立高校ではできないということで、大変興味を持って見せていただいています。

【遠藤議長】 逆に言えば、高専に対する期待感が大きいということでしょう。

時間も押してまいりましたので、その後の「学生支援、生活支援等」、これは金岡委員がいろんな形でサポートされていると思うのですが、残念ながら今日ご欠席ですが、それと「教育環境の整備・活用」を含めましてご意見いかがでしょうか。

【松坂委員】 「教育環境の整備・活用」については私がやってくるようにと言われていたので。

【遠藤議長】 失礼しました。是非お願いします。

【松坂委員】 ざっと読んでまいりましたけれども、今までの計画や実施されたこと、あるいはこれから始められることについて、この時期にもう一度点検、検討を行うことは大変いいことだと思います。

高専機構のマスタープランに準拠する教育、研究用の施設を、4、5年、中期的なことで完成される基本計画の検討にも着手されたことは結構なことだと思います。

老朽化設備の更新や最先端の機器の導入は、即社会に適応する卒業生を期待される教育の場としての本学にとって重要なことだと思っています。是非最新のものをご検討願いたいと思います。

しかも、最新の設備といいますのは、省エネ効果と同時に経済的な効果もありますので、そういうことを大いに採用することで、光熱水費の削減を図られることも進めていただければよろしいかと思っています。

エコアクション21ですが、私は2回そのことについてお話ししてきましたけれども、本年11月に認証が更新される時に射水を加えようというお話で、それは大変結構なことです。高専の中でも最初にやられていることですから、是非今回認証を受けられるように頑張ってくださいと思います。

3カ年になりますけれども、是非認証する委員、資格を持つ人間も、それに関する近い

学部があることですから、中から出るとなご格好のいいことになるのではないかと。検査官みたいなものですね。そういう方が出られるといいのではないかなと思っています。

2つのキャンパスがあるのが特徴ですが、そのことでいろいろご苦勞なさっているのは、この文章の中からも読み取ることができます。頑張っていたきたいと思えますけれども、2つに分かれていることで、両方の通信網といいますか、コミュニケーションのシステムをもっと構築しようとされていますね。IT化を進めようと。そういうことをどんどんやるということは、それに慣れた学生が生まれてくる。これはだから、離れていることが悪いのではなくて、離れたことでそういう構築をして、そういう生徒を育てる環境としては逆にいいと考えた方がいいのではないかというのが1つです。

いつも問題になります若潮丸の有効利用につきましては、いろいろなことが書いてありますけれども、商船学科以外の活動、利用では、地域の要望を入れられまして、各団体の体験航海や各種の研究や調査を行って地域との友好関係を大切にしておられることがよくわかりました。大事にさせていただきたいと思えます。

最後のところにあります学内の健康と精神面、ハラスメントも含めてのケアですけれども、安全に対する教育、指導など学生とのコミュニケーションをとっておられて、ここにある文言だけでもたくさんあるくらいで、本当に一生懸命やっておられると思えますけれども、特にハラスメントや疾病に関しては個人の意識が大事ですので、そういうことが中心になるようなことが何かできればいいなと思っています。

以上です。

【遠藤議長】 まとめていただきまして、ありがとうございます。

ほかのところに関していかがですか。よろしいですか。

具体の数字もいろいろこの資料に示していただいていますし、さまざまな努力、検討がされているということで、今の松坂委員のご意見も含めて検討課題としていただければと思います。

次に、「研究に関する事項」に移らせていただきます。

丁子副校長、お願いします。

【丁子副校長】 先程から議論していただいていますように、高専の本来の使命は教育ですけれども、その中で研究はどのような位置づけにあるかということ、各教員の研究活動を促進し、その成果を教育に反映させる目的で研究をするという認識で行っています。

資料2の42ページをご覧くださいと思います。

まず文部科学省の科研費からですけれども、43ページに全国高専の順位が書いてあります。点数の上では3番手に上がっています。トップは仙台高専で、断トツです。

44ページですが、一時採択件数等が下がっていた時期がありますが、今無事回復ということで、さらに科研費の採択、これは単なる調書の書き方ばかりではなく内容、研究計画の実質的なものが評価され、採択されるかされないかということですので、いろいろと工夫をして、さらに来年度上げていくような努力をしています。

45ページは企業との共同研究、46ページの順位では2番手に入っています。

先程の科研費の一番手、二番手はかなり下がっていますので、富山高専の場合、科研費がどちらかと言えば基礎的な研究だとすると、民間との共同研究は応用研究だと。そのバランスが非常によくとれている研究体制になっていると理解しています。

47ページですが、文部科学省や高専機構等のいろんな競争的な資金に取り組んでいます。いずれも全国の高専に比ベトップクラスの採択を得て、総額6,500万円余りの資金で学生教育にいろいろと当たっているところです。今日は金岡委員がご欠席ですけれども、富山第一銀行奨学財団さんからも毎年200万円ずつ助成金をいただいているところです。

最後にエコテクノロジー、昨年度、地域の企業にもいろいろと協力いただき、エコテクノロジーに関するアジア国際シンポジウムを宇奈月で開催したことを報告させていただきます。

各々更に研究を発展させ、学生教育に貢献していくということで、いろいろと施策をしているところです。

簡単ですが、以上です。

【遠藤議長】 これに関しては、科学研究費の数値がすばらしい。教員の数が今130ぐらい。お一人1つとすれば約半数の方が応募されている。本年度は60件が出て、うち20件が採択されているということは、採択率が33.33%。ということは、平均よりはるかにいい。

【米田校長】 それは継続も含めてです。

【遠藤議長】 新規ではなくて。それでも3割を超えているのはすばらしいことだと思います。研究力も継続されていることの表れだと思います。

様々な研究の内容があると思いますが、皆様からコメントをいただければと思います。方向性などしっかりしたものが見えていますので、さらに発展するために相互の連携などいろいろやられて進められたらと思います。

気になったのは、研究に関してといいますか、ほかの大学との連携ということで、例え

ば長岡や豊橋の技術系の大学との連携は具体的な例として書かれていましたけれども、県立大やうちなど県内での連携はこれには出てこないものなのですか。

【米田校長】 これには出ていませんが、これからお願いすることを考えています。

【遠藤議長】 わかりました。先程言った学生の教育、さらに研究も含めて、オール富山でできるようなことが出ていけば一番いいのだろうと思います。

では、時間が押していますので、研究はこれで終わらせていただいて、ますますのご発展を期待しています。

続きまして、「社会との連携、国際交流に関する事項」について、成瀬副校長からお願いします。

【成瀬副校長】 地域人材開発本部を設置していきまして、地域イノベーションセンター、教育技術センター、国際教育センターの3つのセンターでさまざまな活動を行っています。

企業向けに関しましては、今ほどの共同研究等の促進ということもありますが、それをさらに刺激するというので、企業向けのWebシーズの作成を今年度考えています。

教育技術センターでは、公開講座、出前授業をさらに積極的にやりまして、特に小中学校の理科教育、国際交流の教育を支援させていただこうと考えています。

⑥については、昨年度まで毎年本校が主管でASETという国際研究集会を開いていましたが、今年度からは全部の高専を対象にISTSという国際会議をタイで行います。その主管も今行っていきまして、学生参加を促しているところです。

最後に⑦については、先程もお話を出していただきましたけれども、インターンシップに積極的に取り組んでいます。英国北アイルランド、米国ハワイ、内モンゴルに、高学年及び専攻科生が8月のお盆明けぐらいから1カ月間出かけることになっています。今後は、アジアの企業を中心にインターンシップを考えていきたいと思っています。

以上です。

【遠藤議長】 この辺につきまして、正橋さん、いかがですか。

【正橋委員】 目的ということではないのですが、2点ありまして、1つは、③にも出ていましたフレッシュエンジニア育成プログラム。ここにも書いてありますように、何回かやってこられている中で、次の方向性をどうするか考えていらっしゃるというお話、当社の方にも来ていただいて少しお話をさせていただきました。

若手の企業の社員の育成に関しては、一般的な事項ですと、どこのセミナー会社みたいなところを使っても似たようなものになってしまいますし、技術的な部分で言うと、どう

しても企業独自の業種などによって決まってくる要素があるので、なかなか難しい部分だと思っています。

ただ、そうはいつでも、高専さんがずっとやってこられている、もしかしたらここに出ているシーズなども含めて、企業では体験できないような要素が必ずあるのではないかと思います。それが若手のいい刺激になるのであれば、そこに何か高専さんらしさを取り入れたプログラムを作っていただけると、非常に魅力的に感じると思うので、少しお時間がかかるかもしれませんが、是非ご検討いただきたいというのが1点です。

海外の留学生とインターンシップの話です。これも前回お話をいただいていたので、こちらに海外から来ている留学生の方を、海外の日本企業でインターンシップという形にできないかというお話が進んでいるということで、非常に魅力のあるお話だと思っています。

当社も海外に幾つか工場がある中で、現地採用するのですけれども、企業への帰属意識が非常に低いという課題があります。文化の違いがあるのでやむを得ないところもあると思うのですが、日本に留学に来られた学生は、日本人気質もわかって、それをよしとする方も結構いるので、そういう方々を例えば日本の企業の中でしばらく育てて、母国に帰っていただいて、母国の日本の企業の中で定着していただいて、行く行くは幹部候補生といった道筋を作ってあげられるとすれば、企業としても、帰属意識が高くて、現地の人があるところに根づいて、またそういう輪が広がっていくという仕組みができると思っていますので、こういうところを非常に力を入れて大きく進めていただきたいなと考えています。

【遠藤議長】 まさにそうですね。向こうの若い人をこっちに取り込んで、日本語がしゃべれる、日本人気質がわかる人が向こうに戻って、海外でも一緒に連携してやってくれるような。

【正橋委員】 我々の年代の人間はあまりしゃべれない。

【遠藤議長】 もうだめですよ。だめとは言ってはいけない。正橋さんは若いから。

【正橋委員】 そういうのが実現できると非常にうれしいなと思います。海外の拠点はどうしても転職が多くて、ペイの額だけで引き抜かれると、せっかく育てたのが出て行ってしまうというのが非常に大きな問題と感じています。

【遠藤議長】 船舶関係など、松坂委員、こういう点で海外との関係はいかがですか。

【松坂委員】 海外よりも何よりも、今、卒業したらいきなり外国人を使わなければならないのが現実ですので、語学ができないということは使い物にならないということです。少々できなくても、頑張る人だったら、そういう環境の中へ入りますので、語学に関して

は慣れていくのではないかと。語学がだめなら、きちっとした技術力を持っていく。それで海外から来ている人たちに尊敬されれば、ワークの不備なところは少々カバーできるというのが現実です。

【遠藤議長】 それはどのエリアにも通じる、おっしゃることの本質ですよ。

【松坂委員】 日本人が少しく外国人がほとんどという感じですので。

【遠藤議長】 この辺に関しては議論も尽きないかと思えますけれども、着実に進んでいくと思えますので、現場と結びながら、より新しい展開をしていただければということだと思います。

他によろしいですか。

(発言する者なし)

【遠藤議長】 では最後、4番目に「管理運営に関する事項」と「その他」に関して、米田校長からお願いします。

【米田校長】 簡単にご説明します。

管理運営、いろんな事柄がありますが、戦略的な事柄は、戦略企画会議で何が課題か、重要課題か選別して議論して方針を決めている。

意思決定というのは、運営審議会で行っています。

また、先程話題になりかけた資源の配分ですが、財務室で配分の基本方針、原案を作っております。

これもちょっと出ましたが、校長裁量経費を持ってしまして、戦略的に重要なところにこれを配分する。

また、意見を聞くという意味で、学生、その保護者、教職員も含め、意見箱に出された意見を参考にしているということです。

危機管理についてはいろんなことが出まして、先般O-157もあって大分報道もされました。個人情報の管理面でもありました。その辺についてしっかりと対応をしていこうといったことを計画の中に書き込んでいます。

以上です。

【遠藤議長】 特に申し上げることはありませんが、1つだけ質問するとすると、運営に関する予算案について文科省などが全部チェックしていろんなことを言うてくるのですか。

【米田校長】 交付を受けた後、学内でどう配分するか。

【遠藤議長】 それは自由なのですか。

【米田校長】 自由です。

【遠藤議長】 各学校への交付金の配分率はもう決まっているのですか。

【米田校長】 はい。本部の方で。

【遠藤議長】 それは人数によるとか何か傾斜がかかったりとか。

【米田校長】 算出基準がありまして、その基準に従って配分すると。ただし、使うのは各学校が独自の判断でいろんなところで使っている。例えば受験費などは指定された方法で使うしかありませんが、それ以外の運営費交付金は、学科に配分するもよし、校長裁量経費に充てて戦略的に使うもよし、それは各学校の判断で使っているという状況です。

【遠藤議長】 確かにいろんな意味で、整備のプランなど大変だろうなどは、うちの大学も建物をどうするかなど常に厳しいのですが、どのような縛りの中でやっていらっしゃるか、逆にいい方向で利用して、いい発展をしていただければと思います。

中期計画に関する22年度の成果と23年度の計画について議論してまいりました。我々も勉強させていただきまし、いろいろな要望を言わせていただきましたが、いろいろ整備がされている中期計画の中間の年というところで、さらにステップアップをしていっていただきたいなと思います。

これでまとめにしたいと思いますが、委員の方々から追加のご発言がありましたらお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。

(発言する者なし)

【遠藤議長】 では、ちょっと時間をオーバーしてしまいましたけれども、22年度の年度計画実施状況及び23年度の年度計画前半に関する運営諮問会議の議事を終了させていただきます。

事務局にお返しいたします。

5. 閉会挨拶

【飯嶋事務部長】 どうもありがとうございました。

閉会に当たりまして、米田校長からご挨拶いたします。

【米田校長】 時間をオーバーするほど熱心にご議論いただきまして、本当にありがとうございました。遠藤先生にはまとめていただき、感謝申し上げます。

第2期中期計画の真ん中の年ということで、特に重要な年であろうと感じています。そ

の中で、今日いただいたご意見、ご指導等を参考にさせていただき、さらなる発展、ステップアップをと言っていたいただきましたが、それに向かって努力してまいりたいと思います。

課題は実はたくさんありまして、それをひとつひとつ全力でクリアしてまいりたいと思いますので、またこれからもいろんな意味でご指導、ご鞭撻を賜ればと思います。

本日はどうもありがとうございました。

〔開会 午後0時10分〕